二〇一三年度大学入試センター試験　解説〈古典〉

第3問　古文　『松陰中納言物語』

［出　典］

『松陰中納言物語』は、室町時代頃に成立したと考えられている**擬古物語**。作者は不明。物語は、主人公である松陰中納言が、恋敵の陰謀によって流罪になるものの、その後真相が明らかになって復位し、一族も栄えるといったものであるが、今回試験に出された部分は、主人公松陰中納言の弟である右衛門督の恋の場面である。近年のセンター試験の古文の問題は、**中世・近世**（鎌倉～江戸時代）の**小説類**（**擬古物語・御伽草子・仮名草子など**）からの出題が多く、擬古物語に分類されると言える作品だけでも、二〇一〇年本試『恋路ゆかしき大将』・二〇〇九年追試『雲隠六帖』・二〇〇七年本試『兵部卿物語』・二〇〇六年追試『竺志船物語』・二〇〇五年国語Ⅰ『木幡の時雨』・二〇〇四年本試『うつせ貝』・二〇〇四年追試『しら露』・二〇〇三年本試『五葉』・二〇〇二年国語Ⅰ『しぐれ』・二〇〇〇年追試『風につれなき』・一九九七年本試『松浦宮物語』などが出題されている。

［通　釈］

（女君と一夜を過ごした）その翌朝、（右衛門督は女君に）御手紙をおやりになろうにも、その手立てがおありでないので、たいそう気をもんで時を過ごしていらっしゃったところ、主人［＝下総守］が参上なさって、「昨日の浦風は、あなた様の身にはお染みにならなかったでしょうか［＝風の寒さが体にこたえなかったか］。たいそう気がかりで」と申し上げなさるので、（右衛門督は）「琴の音［＝女君］のことを言っているのだろう」とお思いになって、「新鮮な思いがする（魅力的な）あでやかさでございました。唐琴でしょうか、見たいものです」とおっしゃるので、（守は）意外に思いながらも、（従者に女君の琴を）持って来させた。（右衛門督は琴を）ちょっとお弾きになって、「（格別な琴であるのでその音が）波の音にまさって聞こえたのも、もっともなことであったようです」とおっしゃって、（琴を）箱にお仕舞いになろうとして、御手紙を（琴の）絃に結びつけさせて、「これを、もとあった所［＝女君のもと］へ（返して下さい）」とおっしゃって、お置きになるので、（従者は奥にある姫君の部屋へ琴を）持って入った。女君は、（右衛門督が）琴を取り寄せなさったことを、「どうしたのかしら」とお思いになって、（箱を）開けて御覧になると、（右衛門督は手紙に）満ち足りないままに別れた思いをお書きになっていて、

「（お逢いしたいと思っていた以前よりも実際に）お会いした後の方が（あなたへのいとおしさが増して）
何かと悲しく思われるなあ。つい人目をはばからなくてはと思ってしまい（堂々と逢いに伺ったり、すぐに
御手紙を差し上げたりもできなくて）。
今晩は、特に早く周りの人を寝静まらせて（ください。そうすれば早くお逢いできますからね）」

と書いてあるけれども、（女君は）「どうしよう」とも分別がおつきにならない。（そこへ）幼い弟君［＝女君の弟］が、「お客様［＝右衛門督］の所へ伺おうと思うのですが、扇を昨日、海に落としてしまいました。（扇なしでは格好が悪いので）いただけませんか」とおっしゃりにいらっしゃった。（女君は）「なんとまあ、（右衛門督様に御返事するのに）都合がよいこと」とお思いになって、（扇の）端に小さく（返歌を）お書きになって、「この（扇の）絵は、上手に書き上がっているので、殿［＝右衛門督］にお見せなさい。そうしたら、（殿はあなたに）小さな犬を、きっと下さるでしょう」と微笑みなさるので、（弟君は）喜んで、母君のいる方へ参りなさって、「扇を、いただきましたよ」と言って、（母君に）お見せになると、（母君は扇に書かれている）歌を見つけなさって、不審なことだとお思いになる。（母君は）「もっと、様子を見たい」と（思って）、（弟君の）後に立って、屏風の陰から（弟君が右衛門督に面会しているところを）お覗きになっていた。（弟君は）「この扇の絵を御覧ください。姉上様が、このように」とおっしゃったので、（右衛門督は）「本当にことさら美しく書き上げてある」とお思いになって、（さらに）御覧になったところ（歌が書かれている）、

（あなたが言う）悲しさも人目をはばかることも（私には）感じられません。（あなたと）別れた時のままの心の乱れのために。

（右衛門督は）「今朝の琴の（絃に付けた歌の）返歌だろう」とお思いになって、「この扇は、私にくださいませんか。（代わりに）犬を、必ず差し上げようと思います（から）。（犬は）京にたくさんいたので、取り寄せて、その時に（差し上げますよ）」とおっしゃって、黄金で造った犬の（絵の描かれた）香箱［＝香を入れておく箱］を（弟君に）くださって、「姉上様にお見せくださいね」とおっしゃったので、（弟君がそれを）持って（姫君の部屋の方へ）お入りになろうとしたところ、母君は、「ますますあやしい」とお思いになって、「私にも、見せなさいな」と言って、（弟君が持っていた香箱を）取り上げてご覧になったところ、（「別れつる」の歌が書いてあるので）「やはりね、昨日の琴の音を（女君のもとへ通う）道しるべになさっているのだろう」とお思いになるけれど、「（二人の関係に気づいた）様子を見せまい」と思って、（気づいたことは）隠しなさった。（弟君が）姉君のもとへいらっしゃって（女君に香箱を）お見せになったところ、（女君は）「（この香箱を）自分の物にしよう」と思って、（香箱を）手にお取りになって、（弟君が）「この犬（の香箱）を（いただきました）」とおっしゃったところ、（女君は）「（お客様が犬をくださるだろうと言った）私の言葉は間違いないでしょうから［＝私の言葉通りにあなたは本物の犬をもらえるだろうから］（この香箱は私に下さい）」とおっしゃって、（香箱の）蓋を取って御覧になったところ、内側に（歌が書かれている）

（あなたが言うように）別れたばかりの今朝は心が乱れているとしても、今晩（周囲の人を早く寝静まら

せて逢おう）と言った（私の手紙の）ことを忘れないでください。

（これを見た女君は消すのは）惜しいとはお思いになるけれど、「人が見ることになったらいけない」とお思いになって、（書かれている歌を）消しなさった。

母君は、「（女君が右衛門督との関係に苦しむことを）これ以上こらえているようなこともつらかろう」と思って、（女君の侍女の）右近をお呼びになって、「今晩、殿が（女君のもとへ）お越しになられるようですよ。しっかりと準備なさい。（女君にとって）将来、頼もしいことであるのだから」とおっしゃるので、（右近は）「やっぱりね。今朝からの（女君の）御様子も、昨日の（お二人が）曲を弾き合わせなさったことも、気がかりだったので（納得したわ）」と思って、こうだ［＝右衛門督の訪問に備えてのことだ］とも（女君には）言わないで、几帳を周囲に掛け渡し、（部屋の）隅々まで塵を払うので、（女君は）「（生い茂る）蓬の露を分け入って通って来るような人もいないのだから、そんなにまで（掃除を）しなくてもよいでしょう」とおっしゃったところ、（右近は）「蓬の露は払いきれなくても、お胸にかかっている露［＝右衛門督との恋愛に関する心配］はきっと今晩晴れるでしょうに」と言って（女君をからかって）笑うので、（女君は）たいそう恥ずかしいとお思いになる。

［解　説］

問1　語句の解釈の問題

必修単語の知識だけでなく、前後の文意からも判断して解く必要がある。

(ア)　**標準**

「いと心もとなくて過ぐし給ひける」の解釈として適当なものを選べ。

「いと／心もとなく／て／過ぐし（過ごす）／給ひ（尊敬の補助動詞）／ける（過去「けり」連体形）」と単語分けされる。

「**いと**」は「たいそう・非常に」の意であり、打消表現と呼応している場合には「あまり・たいして」の意になる副詞。ここでは「なし」は「心もとなし」という形容詞の語尾であり、打消表現ではないから、②「たいそう」・③「ひどく」・⑤「たいへん」は正しいが、①「そんなに」・④「それほど」は正しくない。「**心もとなし**」は「待ち遠しい・気がかりだ・不安だ・ぼんやりしている」といった意味の形容詞。これが正しいのは、②「気をもんで」（「気をもむ」とは、あれこれ気にして悩むこと）・③「不安に思って」・⑤「ぼんやりと」。「**過ぐす**」も、②・③・④・⑤は正しく、それぞれの語の意味のチェックでは、②・③・⑤は間違いがないことになる。

ところで、傍線部が表しているのは、「御文／やら（送る）／せ（尊敬「す」連用形）／給は（尊敬の補助動詞）／ん（婉曲「む」連体形）／も、／せん方（やりよう・手立て）／の／おはしまさ（おありになる）／ね（打消「ず」已然形）」、つまり、「右衛門督が女君に手紙を送ろうと思うものの手立てがない」という状態のことであるから、「心もとなくて」の内容としては、「気をもんで」という表現が最もふさわしいとすべきであろう。②が正解。

なお、男女が一夜をともにした時は、その翌朝に、男性側から**後朝（きぬぎぬ）の文**を送るのが礼儀である。

(イ) **標準**

「飽かざりし名残をあそばして」の解釈として適当なものを選べ。

「飽か／ざり（打消「ず」連用形）／し（過去「き」連体形）／名残／を／あそばし／て（接続助詞）」と単語分けされる。

「飽く」は、現代語同様に「飽きる」の意でも使われるが、現代語と同意（③・⑤）であれば問われないであろう。「飽く」は、本来は「十分満足する」の意で、打消表現を伴って**「飽かず」**のように使われると、「物足りない・名残惜しい」といった意味になるので、②「物足りなかった」・④「満ち足りないままに」が良さそうだと考えたい。**「名残」**は、現代語同様に「物事や人が過ぎ去ったあとに余韻などが残ること」。③「面影」、④「別れた思い」、⑤「余韻」が正しいが、「飽かず」で②・③に絞ってあり、②の「逢瀬の悲しみ」はややニュアンスが異なるので、④の「別れた思い」のほうが適当である。**「あそばす」**は、「なさる」、または、「演奏なさる」の意の尊敬語であるから、何を「なさる」ことにも用いる。傍線部の最後には接続助詞「て」があるが、一般に**接続助詞「て」の前後は同主語であるから**、傍線部の主体である右衛門督が、Aの歌やその次の一行を手紙に書いているということであり、Aの歌やその次の一行へつながる文意から見ても、④「お書きになって」がスムーズである。よって、正解は④。

(ウ) **応用**

「いみじくこそ書きなしつれ」の解釈として適当なものを選べ。

「いみじく／こそ／書きなし／つれ（完了「つ」已然形）」と単語分けされる。

「いみじ」は、「たいそう～だ」の意の形容詞で、「～」の部分は、必要に応じて、前後の文意から判断して補って訳す。これが明確に訳されているのは、②「ひどく悲しげに」であるが、③「ことさらに美しく」・④「とりわけ得意げに」・「いかにも愛情深く」も、補い方はそれぞれであるが近い表現であると言える。ただし、動詞**「成す」**（する）を補助的に使う、**「～なす」**は、「ことさらに（わざわざ）～する・格別に～する・いかにも～する」といった意味であるから、それも含めて考えると、②よりも、むしろ③・④・⑤のほうが正しいことになる。

ところで、傍線部を含む、「まことにいみじくこそ書きなしつれ」は、女君から、「この絵は、おもしろう書きなしたれば、殿に見せさせ給へ」、つまり、「この扇の絵は、上手に書き上がっているので、殿［＝右衛門督］にお見せなさい」と言われた弟君が、扇に描かれた絵を、「この扇の絵を見させ給へ。姉君の、かくこそ」と言って右衛門督に見せた時の、右衛門督の感想である。その絵は「**おもしろう**」（趣深く・美しく・上手に）描かれたものであるというのであるから、右衛門督が「まことにいみじく」書かれていると言っているのは、その絵のことなのである。とすれば、その絵の評価として、ふさわしく「いみじ」を訳しているのは、③「美しく」であろう。よって、③が正解。**絵について言っているのである**ことを文脈上読み取れなければ正解できない。

正解　(ア) 21　②　(イ) 22　④　(ウ) 23　③　（各5点）

問2　文法（「ぬ・に」の識別）の問題　基本

波線部a～dの文法的説明の組合せとして正しいものを選べ。

まず、「ぬ」の識別を確認しよう。

まとめ　「ぬ」の識別

① **完了の助動詞「ぬ」の終止形**

識別法　連用形に接続する。
　　終止形として働いている。

例　花咲きぬ。

② **打消の助動詞「ず」の連体形**

識別法　未然形に接続する。
　　連体形として働いている。

例　花咲かぬ時は、

③ **ナ行変格活用動詞連用形語尾**

識別法　「死ぬ|・往ぬ|」の二例のみ。

aの「ぬ」は、直前の「給は」が四段活用の**未然形**であり、下に連体形に接続する断定の助動詞「なり」の連用形「に」があるから、右の②で、打消の助動詞「ず」の連体形である。また、**d**の「ぬ」は、直前の「賜ひ」が四段活用の**連用形**であり、下に終止形に接続する推量の助動詞「べし」の已然形「べけれ」があるから、右の①で、完了の助動詞「ぬ」の終止形である。よって、**a**・**d**が判断できた段階で、答は①・⑤に絞られることになる。なお、「**給ふ**」と「**賜ふ**」は、漢字の当てられ方は違っているが、いずれも「たまふ」で、同語である。

次に、「に」の識別について確認しておこう。

まとめ　**「に」識別**

※「に」が単語の一部である場合は①～④。

① **ナ行変格活用動詞連用形語尾**

識別法　「死に|・往に|」の二例のみ。

② **ナリ活用の形容動詞連用形語尾**

識別法　物事の性質や状態を表し、直前に「いと（たいそう）」を補っても訳せる。単語で覚えておく。

例　あはれに・あてに・はるかに・美しげに　等

③ **副詞の一部**

識別法　単語で覚えておく。

例　げに・けに・まことに・いかに　等

④ **格助詞「にて」の一部**

識別法　「にて」の状態で使われていて、その部分が「であって」とは訳せない。「であって」と訳せる場合は⑤の(2)なので注意。

例　都にて会ひし人なり。（都で会った人である。）

※「に」が独立した一単語である場合は⑤～⑧。

⑤　**断定の助動詞「なり」の連用形**

識別法　次の二つのパターンでしか使われない。

(1)　後方に「あり・侍り・おはす」等、物や人の存在を表す動詞を伴い、「に」自体が「で」と訳せる場合。

例　そは、わが兄にやあらむ。（それは、私の兄であろうか。）

(2)　「にて・にして」の状態で使われていて、その部分が「であって」と訳せる場合。

例　そは我が兄にて、太郎といふ者なり。（それは私の兄であって、太郎という者である。）

⑥　**完了の助動詞「ぬ」の連用形**

識別法　連用形である語に接続する。

過去・完了の助動詞の直前にあることが多い。

例　花咲きにけり。［「咲き」は連用形、「けり」は過去の助動詞。］

⑦　**格助詞「に」**

識別法　独立している「に」で、⑤でも⑥でもなく、そのまま「に」と訳せる。

例　山に登りけり。（山に登った。）

⑧　**接続助詞「に」**

識別法　独立している「に」で、⑤でも⑥でもなく、そのまま「に」とは訳せない。「ので・と・ところ・のに」の訳があてはまる。

例　風吹きけるに、花散りぬ。（風が吹いたので、花は散った。）

a・**d**で答が①・⑤に絞られているから、考えるまでもなく、**b**は断定の助動詞ということになるが、**b**の「に」は、直前が体言（名詞）であり、後に**存在の意を示す動詞「ある」**があり、「琴の音にやあるらん」は「琴の音であろうか」と訳せそうであるから、右の⑤の(1)の状態で、断定の助動詞「なり」の連用形で間違いない。**c**がポイントになるが、これは、形容動詞**「むべなり」**（もっともだ）と、一単語であることを知っていなければならない。よって、正解は①。

正解　24　①　（5点）

問3　主体、及び、心情説明の問題　応用

傍線部X「さればよ」とあるが、誰が、どのようなことを思ったのか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず、傍線部の「**さればよ**」は、良くも悪くも予想が当たった時に言う言葉で、「やっぱりね」などと訳す必修語である。

そこで、この場面で誰が何を「やっぱりね、思っていた通りだ」と思うかを考えなくてはならないが、弟君が女君から受け取った扇を右衛門督に見せに行く時に、母君は扇に書かれている女君の歌を見て、「あやしきことに」と思っている。つまり、**母君はその時点で女君と右衛門督が男女の関係になったのではないかと疑っている**のである（本文11～12行目）。そして、今度は弟君が右衛門督から受け取った香箱を女君に見せに行こうとし、母君がその香箱を取り上げた場面で書かれているのが、傍線部を含む、「さればよ、昨日の琴の音をしるべにこそし給ふらめ（やはりね、昨日の琴の音を道しるべになさっているのだろう）」という心中会話（心中思惟）なのである。女君の琴の音を道しるべにしたということは、琴の音を便りにして女君のもとを訪れたという意味であろうから、この心中会話部分は、**女君と右衛門督の関係を疑っていた人物が、それを確信して「やはりそうであったのか」と思っている**ということになり、つまり、それは母君であることになる。

よって、選択肢は、設問の「誰が」を「母君が」としている③・④・⑤にしぼられることになるが、③は、「ぎこちない様子を歯がゆく感じながらも、口をはさんで二人の仲が表ざたになってしまうと困るので」が本文にはない。本文には、ただ、「気色見えじと、もて隠し給へり（気づいた様子を見せまいと思って、隠しなさった）」とあるだけである。④は、「沈み込んでいた娘の様子を見て心配していた」が本文にはない。本文後ろから3行目には、「今朝よりの御ありさまも、～心もとなかりつれ（今朝からの女君の御様子も、～気がかりだった）」とあるが、これは右近の思いであり、母君が沈み込んだ女君の様子を心配している様子は本文には書かれていない。また、④は、「大変なことになってしまったと思った」とあり、女君と右衛門督が男女の仲になることについて、母君があわて、困惑しているかのように説明されているが、これも正しくない。母君が右近に、「今宵、殿の渡り給はんぞ。よくしつらひ給へ。行く末、頼もしきことにてあるなれば（殿が女君のもとへお越しになられるようですよ。しっかりと準備なさい。

将来、頼もしいことであるのだから）」と言っていることからすると、母君は、女君と右衛門督が男女の仲になることを歓迎しているのである。

正解となる⑤は、**女君と右衛門督の関係を疑っていたことに対して、「さればよ」と思っているという説明**も正しく、**女君と右衛門督が男女の仲になることを「喜ばしいことだと思った」と説明している点**も正しい。**最終段落に書かれている母君の言動**を踏まえないと、⑤の「喜ばしいことだと思った」が正しいことは判断がつかない。

正解　25　⑤　（7点）

問4　心情説明の問題　標準

傍線部Y「蓬の露は払はずとも、御胸の露は今宵晴れなんものを」とあるが、この言葉には右近のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを選べ。

各選択肢で、右近の気持ちは、後半（「女君に対して」の後）に書かれており、そこを検証することで正解は得られる。

まずは、傍線部Yを言っている右近が、すでに母君から、「今宵、殿の渡り給はんぞ（殿が女君のもとへお越しになられるようですよ）」と聞き及んだ上で、「さればよ、今朝よりの御ありさまも、昨日の楽を弾き替へ給ひしも、心もとなかりつれば（やっぱりね、今朝からの女君の御様子も、昨日のお二人が曲を弾き合わせなさったことも、気がかりだったから）」と思っていることを読み取らなくてはならない。右近は、女君の悩む姿を見て心配していたが、母君の話を聞いて、「やはり女君は右衛門督とのことで悩んでいたのだ」と納得し、しかも、その右衛門督が今夜女君のもとへ来ると知っているのである。「かくとも言はで」、つまり、「そうであると女君には言わないで」右近は女君の部屋の掃除を始めるのであるが、**女君の悩みの原因が右衛門督とのことであることも、その悩みが今夜右衛門督の訪問によって解消されるであろうことも知っていて**、「御胸の露は今宵晴れなんものを（お胸にかかっている露はきっと今晩晴れるでしょうに）」と言っているのであるから、この「露」とは「右衛門督との恋愛に関する心配」のことである。右近は、「今夜心配事がなくなりますね」と言いつつ、暗に、「今夜右衛門督様が来るのでしょ」と言っているのであるが、本文末に「とうち笑へば、いと恥づかしと思す」とあるように、右近は**これを言って笑っており**、それを**聞いた女君はひどく恥ずかしがっている**。

これらを踏まえると、④の後半部、「右衛門督の訪れをひそかに待っている女君の心はわかっているとからかう気持ち」は正しい。①の後半部は、「部屋の塵は」が本文の「蓬の露は」と合致していない。②の後半部は右衛門督との件について触れていない。③の後半部は、掃除の必要性を強調している点や、「安心させる」が正しくない。**笑いながら言って、相手が恥ずかしがっている状況は、からかっている（④）と考えるのがふさわしい**のである。その点から見ると、⑤の後半の「反発する」も正しくないことになる。

なお、各選択肢の前半部で説明されている女君の態度であるが、女君が言っている、「蓬生の露を分くらむ人もなきを、さもせずともありなん」とは、「生い茂る蓬の露を分け入って通って来るような人もいないのだから、そんなにまで掃除をしなくてもよいでしょう」といった意味である。「**蓬生**」は、蓬などの雑草が生い茂る荒れた場所のこと。軽く触れただけで落ちてしまう露も、訪れる人もいなければ葉の上にあって落ちないままなのであるが、それゆえに、蓬生にびっしりと露が降りているというのは、いかにも寂しげな様子である。**物語などでは、そのような寂しげな場所に住む人を、わざわざ蓬をかき分け、露で衣服を濡らして会いに行くという場面もある**。ここで女君の庭に実際に蓬が生えているかどうかは、本文に書かれていないのでわからない。女君が言っているのは、「私のような寂しく暮らす者のところへ通ってくる男性もいないのだから、そんなに丹念に掃除をしなくてもよいだろう」ということなのである。これを踏まえると、前半の女君については、③・④は正しいが、①「訪ねてくるかわからない人を思って」・②「踏み分けられないほど蓬が茂った庭を恥ずかしがる」・⑤「すねる」は、誤りであることになる。

正解　26　④　（7点）

問5　和歌説明の問題　応用

A～Cの和歌に関する説明として最も適当なものを選べ。

A・B・Cがそれぞれ誰の歌であるかについては、Aが琴の緒にひそかにつけておいた右衛門督の歌、Bが扇に書いた女君の歌、Cが書箱のふたに書いた右衛門督の歌で、すべて間違いがない。この点でキズがないために、ポイントはすべての歌の解釈になり、難しい問題になっている。

それぞれの和歌の解釈は、通釈を参照してほしいが、正解を得るポイントは、Aの歌の「あひみての後」と、Bの歌の「思ほえず」である。

Aの歌の「あひみての後」は、百人一首でも有名な、「**逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔はものを思はざりけり**（逢って契った後の愛しく切ない思いに比べると、逢う以前に逢いたく思って苦しんだ思いなど苦しみの内に入らないなあ）」（拾遺和歌集・恋二・藤原敦忠）によって知られる表現で、Aの歌の「あひみての後こそ物はかなしけれ」も、敦忠の歌同様に、「あなたに逢う前も逢いたい気持ちがつのってつらかったが、逢ってしまうと逢う前にも増して愛おしく切ない気持ちになってしまう」という意味である。よって、Aについての説明は、①と②は正しいが、③は正しくない。

Bの歌の「思ほえず」の「思ほえ」は、ヤ行下二段活用動詞「思ほゆ」の未然形。「思ほゆ」は「おぼゆ（覚ゆ）」の古いかたちで、さらに古くは「思はゆ」というかたちでも使われたが、いずれも「感じる・思われる」といった意味であり、これに打消の助動詞が付いた「思ほえず」は「感じない・思われない」といった意味であることになる。つまり、Bの歌の「かなしさも忍ばんことも思ほえず」とは、「悲しさも人目をはばかることも感じられません」という意味であり、Bについての説明は、これを正しく説明している②の「悲しみに浸ったり人目を気にしたりする心の余裕がない」

が正しい。「心が乱れて何も感じたり考えたりすることができない」と言っているのであるから、①「悲嘆にくれて」・④「恋い慕う感情と、恋心を抑えねばならないという理性が入り乱れた状態」・⑤「つらさに加えて、会えない悲しみに堪え続けることの苦しさ」といった、**何かしらの感情があるという説明は正しくない**のである。①は「右衛門督のもとに忍んで行く手段も思いつかない」も間違いである。正解は②。

なお、Bの歌の「かなしさ」と「忍ばんこと」が、右衛門督がAの歌で言っている「かなしけれ」と「人目をつつむ」のことだと気がつけば、②の「右衛門督と違って」が正しいことも分かるだろう。**和歌の贈答（やりとり）では、後で詠まれている歌が、先に詠まれている歌を踏まえて、同語を使ったり、類似した趣旨を詠んだりすることが多い**ので、ここでも、Aの「かなしけれ・人目をつつむ」を、Bでは「かなしさ・忍ばん」と詠み、Bの「心まどひ」を、Cでは「心のまどふ」と詠んでいると考えるべきであり、さらに言えば、Cの「今宵と言ひしこと」は、Aの歌に書き添えて「今宵は、いととく人をしづめて」と書いたことを言っているのだと考えるべきである。

Cについての説明が正しいのは、その点からみると⑤である。③は「冷静さを失って思わず書いた」、④は「二人で交わした」が誤りである。

五つの選択肢の内、四つでBについて説明しているので、まずBの歌意を確定すれば、選択肢は一気に絞られる。Bの説明を含まない③についてはAに関する説明が大きく間違っているので、正解でないことはわかりやすいだろう。

正解　27　②　（8点）

問6　表現と内容に関する説明の問題　応用

この文章の表現と内容に関する説明として最も適当なものを選べ。

表現と内容に関する問題では、実際にそのような表現が本文にあるのか、また、そのような内容が本文と合致するのかを照合していけば正解にたどり着けることが多く、**表現の効果についての説明は正否の判断の材料にしなくてよい**。たとえば、①の「対比的に」、②の「予感させている」、③「心が読み取れるようになっている」、⑤の「対照的に・巧みに」等は、そのようにとれるかどうかは読者次第という面があり、これについて時間をかけて考えても判断がつかないことが多いのである。

①は、まず、「『蓬』などの自然の描写によって」が誤り。**問4**で解説したように、女君が言っている「蓬生の露～」は、通ってくる男性もいない自分を表すものとして言われているのであって、実際の自然を描いているわけではないのである。また、「『琴の音』を響かせる女君」は、前書きで説明されているものの、本文中にはその様子は描かれていない。さらに、「右衛門督が女君に心ひかれるいきさつが明らかになっている」も正しくない。右衛門督が、琴の音をきっかけにしてひなにもまれな女君の優美さに惹かれたことは、やはり前書きから読み取れることであり、本文には右衛門督と

女君がすでに契りを交わした後のことが描かれているのである。

②は、高い敬意を表す表現（二重尊敬・最高敬語）が、「都人の右衛門督に対してのみ用いられ、東国暮らしの女君には用いられていない」としている点が誤り。「見させ給へば」（本文5行目）・「うち笑ませ給へば」（本文11行目）など、女君に対しても使われている箇所はある。それゆえ、「身分の差がはっきりわかる」や、「身分違いの恋に試練が待ち受けている」も成立しないことになる。

③は、「周囲の『人』に認めてもらうことを恋の成就の重要な条件と考える」が、本文にそのように読み取れるところがない。又、厳密に言うと、右近の登場は最終段落であり、その「反応」は、右衛門督と女君の「やりとりの合間に」は「差し挟まれ」て出て来てはいない。

④は、まず「小犬」が誤り。正しくは、「扇」である。また、**C**の歌は**A**の歌に添えた一文の内容を再び確認しているものであって、その二首の間に詠み手である右衛門督の「心情の変化」はない。また、女君の歌は、本文では**B**だけであるから、そこに「少しずつ心を通わせていく」といった「心情の変化」は見て取りようがない。

⑤は、最初に述べたように、「対照的に・巧みに」描かれているかどうかはともかくとして、説明されている内容は全て本文と合致していて誤りがない。母君も右近も、右衛門督と女君の関係の事実を知ると「されば よ（やっぱりね）」と言っており、二人とも早くから右衛門督と女君の関係を怪しんでいたことがわかるから、「敏感に反応し行動する」にも誤りはなく、下総守についても、弟君についても、本文の内容と照らして間違いがない。よって、⑤が正解。

選択肢が長いので、本文と照合するのが大変であろうと思われる。

正解　28　⑤　（8点）

第4問　漢文　張耒『張耒集』

［書き下し文］

始め余丙子の秋を以て、宛丘南門の霊通禅刹の西堂に寓居す。是の歳の季冬、手づから両海棠を堂下に植う。丁丑の春に至り、時沢屢至り、棠茂悦するなり。仲春、且に華さかんとす。余常に与に飲む所の者と約し、且つ美酒を致し、将に樹間に一酔せんとす。是の月の六日、予謫書を被り、治行して黄州に之く。俗事紛然とし、余も亦た居を遷し、因りて復た花を省みず。黄に到りて且に周歳ならんとす。寺僧の書来たりて、花の自如たるを言ふなり。余因りて思ふに、茲の棠の植ゑし所は、余の寢を去ること十歩と無く、隣里親戚と一飲して之を楽しまんと欲せば、宜しく必ず難きこと無きを得べきなり。然れども至るに垂として之を失ふ。事の知るべからざること此くのごとし。今棠を去ること且に千里ならんとし、又身は罪籍に在りて、其の行止は未だ自ら期すること能はざれば、其の棠に于いては未だ遽かには見るを得ざるなり。然れども均しく知るべからざるに于いては、則ち亦た安くんぞ此の花の忽然として吾が目前に在らざるを知らんや。

［通　釈］

以前私は丙子の年（紹聖三年）の秋に、宛丘の南門にあった霊通寺の西堂に仮り住まいしていた。この年の冬の末に、自分の手で二本の海棠の木を西堂のそばに植えた。（翌）丁丑の年（紹聖四年）の春に、時宜を得て降る恵みの雨もたびたび降って、海棠は盛んにしげって成長した。陰暦の二月、いまにも花が咲きそうになった。私はいつも一緒に酒をくみかわす友人と約束し、美酒を取り寄せて、（花の咲いた海棠の）木の下で（花見の宴を催して）飲もうと思った。（ところが）その月の六日、私は左遷を命じる文書を受けて、（すぐに）旅支度をして黄州に向かった。（政変によって）世の中は騒がしくなり、私もまた住まいを移し、それで、それきり海棠の花を見ることもなかった。黄州に来て一年がたとうとしていた。（そのころ、あの宛丘の）霊通寺の僧から手紙が届いて、（私が植えた海棠の）花が以前と同じように花を咲かせたということであった。私はそこで思った。あの海棠を植えたところは、私の（住んでいた）部屋から十歩と離れておらず、隣近所の人や親戚の者と（花を見て）宴を開いて楽しもうと思えば、何の難しいこともなかったのである。しかし（あのとき）まさにそうしようとするときにできなかった。これから先に起こることを予測できないのは、このようである。今海棠とは千里もあろうかというほど離れており、またわが身は左遷の罪を被っていて、自分の出処進退も自分で決めることができないのであるから、（自分が植えた）海棠の花をすぐには見ることもできないのである。しかし、同じく一寸先のことはわからないということにおいては、また、どうしてこの（海棠の）花が思いがけず私の目の前に存在することがないとわかるだろうか（、いや、逆に、思いがけず罪を許されて、目の前であの海棠の花を見る日も訪れるかもしれないのだ）。

［解　説］

問1　語の意味と熟語の合致の問題　(1)　標準　(2)　標準

傍線部(1)「手」・(2)「致」と同じ意味の「手」「致」を含む熟語として最も適当なものを、それぞれ選べ。

問1は、二〇〇九年度から二〇一二年度まで、四年連続で「**語句の意味**」の問題であったが、傾向に変化が見られた。二〇〇四年度から二〇〇八年度は五年連続「**漢字の読み**」の問題であったから、今回の形はしばらく続くかもしれない。

(1)「**手**」は、「両海棠を堂下に植う」の「植う」を修飾するから、副詞で、「**手づから**」と読む。「自分の手で。直接自分の手を使って」、あるいは、「自ら。自分で」の意である。含まれる「手」がその意味になる熟語は③「手記」（自分で記したもの。自ら体験したことなどを書き綴ったもの）である。**正解は③**。

①「名手」は「すぐれた腕前の人」。②「挙手」は「手をあげること」。④「手腕」は「手」も「腕」も「うでまえ。技量」のこと。⑤「手法」は「物を作ったり事を行なったりする際のやり方。技術的な方法」。

(2)「**致**」は「**いたす**」と読む動詞である。「送り届ける。つかわす。やる」「与える。授ける」「伝える。言いやる」「示す。表す」「ゆだねる。まかせる」「極める。尽くす」「招く。誘う」「集める」「得る。手に入れる」など、さまざまな意味をもつ。ここは、「美酒を致し、将に樹間に一酔せんとす」という文脈にあり、「手に入れる。取り寄せる」のような意であろう。最も近いのは、②の「**招致**」（まねき寄せる）であろう。**正解は②**。

①「筆致」は「書きぶり。文章のおもむき」。③「極致」は「この上ないおもむき」。④「風致」は「美しいおもむき」。⑤「一致」は「一つになること。相合すること」で、「致」は「かさなる」意である。

正解　(1)　29　③　(2)　30　②　（各4点）

問2　心情説明の問題　基本

傍線部A「時　沢　屢　至、棠　茂　悦　也」から読み取れる筆者の心情として最も適当なものを選べ。

傍線部A「時沢屢至り、棠茂悦するなり」そのものは、「**時沢**」「**茂悦**」にそれぞれ（**注6・7**）がついているから、「時宜を得て（＝ちょうどよい時をとらえて）降る恵みの雨もたびたび降って、海棠は盛んにしげり成長したのである」といった意味である。書いてあることは、海棠のことであ

るが、それは筆者が「手づから」植えた思い入れのある木で、設問のように、そこには筆者自身の心情を読むことができると言ってよいであろう。

海棠にとって「時沢」は恵みの雨であり、「茂悦」しているのであるから、当然この**傍線部の心情はプラス方向**のものである。③のように、「退屈を覚え始めている」とか、④のように、「春の雨に」「閉口(へいこう)している」とか、⑤のように、「前途への不安を募(つの)らせている」とかいうような、マイナスの心情とは考えにくい。③・④・⑤は消去する。

②は、「今年の豊作を予感し」が唐突であるし、筆者は「人々が幸福に募らせることを期待」するところまでの考えは持っていない。少くとも、そのように言える根拠が文中にないのである。よって、**正解は①**。「謫書を被」って左遷されるまでの、宛丘の霊通寺での生活は「心静かな」もので、その生活に、筆者は「満足」していたのであろう。

正解　31　①　（6点）

問3　状況の説明の問題　標準

傍線部B「不二復　省レ花」から読み取れる筆者の状況を説明したものとして最も適当なものを選べ。

傍線部Bは送りがなが省かれているが、ここは、「**不復…**」の形の句法のポイントに着眼できれば、「**復(ま)た花(はな)を省(かへり)みず**」と読むことは、比較的容易であろう。

「**不二復A一（まタAセず）**」は、いわゆる**部分否定**の形で、「**二度と再びAしない**」と訳すのであるが、この「復た」による部分否定は、「一度はAしたが、二度と再びAしなかった」というニュアンスの場合と、「一度はAしたが」という前提はなく、「それきり、二度と再びAしなかった」というニュアンスの場合とがあり、ここは後者のほうである。つまり、「筆者は政変に際して黄州に左遷され」（ここまではすべての選択肢が共通している）、海棠を植えた宛丘の地を離れてしまったために、③「それきり海棠の花を見ることがなかった」のである。

海棠は「且(まさ)に華(はな)さかんと」していたのであるから、いまにも咲こうかという状態になっていたのであろうが咲いた花は見ないまま黄州に行ったと考えるべきであろう。

①は、「ふたたび…になった」で、否定の意がないし、以前誰かに海棠を「委ね」てもいない。②も、以前一度「海棠を移し替え」たことがあるわけではなく、「できなかった」の不可能の意もよけいである。④の「また…なかった」では全部否定になり、以前にも「花見の宴を開く約束を果たせなかった」ことがあるわけでもないので間違い。⑤はいかにも部分否定の形であるが、これも、「且に華さかんとす」がどの程度「咲かんとす」なのかは微妙でもあるが、一度「海棠の花を咲かせること」ができたわけではないと考えたい。⑤も「できなかった」の不可能の意がキズである。

正解　32　③　（6点）

問4　傍線部「時点」を問う問題　基本

傍線部C「寺 僧 書 来」について、このことがあったのはいつか。最も適当なものを選べ。

「黄に到りて且に周歳ならんと」して「寺僧の書」が届いたのである。「**周歳**」は「まる一年。満一年」のことである。「黄に到」ったのは、つまり、左遷先の黄州に着いたのは「謫書」を「被」った「是の日（＝仲春＝陰暦二月）の六日」から間もなくのことであろう。ということは、そこから丸一年になろうとするころなのであるから、「寺僧の書」が届いたのは、③「筆者が左遷された（ここまでは全選択肢共通）翌年の春」である。

正解　33　③　（6点）

問5　返り点のつけ方と書き下し文の組合せの問題　標準

傍線部D「欲 与 隣 里 親 戚 一 飲 而 楽 之」について、返り点のつけ方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを選べ。

ポイントは「**与**」である。「与」は用法の多い重要語で、①・②のように「**と**」とも、③・④のように「**与る**」とも、⑤のように「**与ふ**」とも読める。

しかし、「与る」は「かかわる。関与する」意であり、③では、「隣近所や親戚の人々の宴にかかわろうとして」、④では、「隣近所や親戚の人々にかかわろうとして」のようになって、変である。花見の宴は筆者は開こうとしているのであり、宴は「隣近所や親戚の人々にかかわろうとして」開こうというのではない。

⑤も、「隣近所や親戚の人々に与えて」と始まっては、何を「与え」るのかわからない。

③・④・⑤は消去してよいであろう。①・②は解釈してみると、

①は、「隣近所や親戚の人々と一杯やろうとして宴を楽しむのは」

②は、「隣近所や親戚の人々と一杯やって宴を楽しもうと思えば」

となるが、海棠の花のもとでの花見の宴は、④の場合同様、「隣里親戚と一飲」するためではない。よって、①にはその点にキズがある。あくまでここは、「そうしようと思えば」できたということを、つまり、**仮定**でものを言っているのである。よって、正解は②。

正解　34　②　（6点）

問6　傍線部の解釈の問題　標準

傍線部E「事 之 不レ可レ知 如レ此」の解釈として最も適当なものを選べ。

「**此くのごとし**」の解釈は、全選択肢が「このようである」と共通しているから、問題は、「事の知るべからざること」の解釈なのであるが、実は、それが「此くのごとし」のさし示すことと合致することになる。

「**此くのごとし**」は、筆者が宛丘の霊通寺の西堂に寓居していたころに植えた海棠の木が、仲春になって「且に華さかんと」していたとき、「常に与に飲む者と」約束して、花が咲いたら木の下で花見の宴をやろうと思っていた矢先、「至るに垂として之を失」ったこと、つまり、左遷されて黄州に行かなくてはならなくなって、花見ができなくなってしまったことをさしている。左遷されることになるなどということは予測できなかったことであり、人生、まさに「一寸先は闇」である、ということであろう。よって、**正解は④**。

①「この地で知人を見つけられない事のいきさつ」、②「事の善悪を自分勝手に判断してはいけない」、③「自分の事が他人に理解されるはずもない」、⑤「努力しても事が成就するとは限らない」は、いずれも、本文中にそれに該当する根拠がない。

正解　35　④　（6点）

問7　書き下し文と解釈の組合せの問題　標準

傍線部F「安 知四此 花 不三忽 然 在二吾 目 前一乎」について、書き下し文と解釈との組合せとして最も適当なものを選べ。

句法上のポイントは、「**安…乎**」で、①・④は「**安くにか**」、②・③・⑤が「**安くんぞ**」で、選択肢は**2対3の配分**になっているが、「どこに…」と場所を尋ねる雰囲気は乏しいから、おそらく「どうして…」、つまり「安くんぞ」のほうが適当であろう。また、「…んか」という読みは不可能ではないが、**基本的には「…んや」で反語形**であるから、「安くんぞ…んや」と呼んでいる③・⑤が残りそうである。

右のように、句法上の知識で絞り込んでゆくことができそうではあるが、何となく見ていると、どれでも読み方としてはありそうで、やっかいな問題である。

一方、解釈のほうの選択肢を見渡してみると、①・④は、「…分かる人がいるのか」「分かる人がいるだろうか」で、「人」と解釈している点にやや

違和感がある。また、「**忽然**」は、「にわかだ。突然だ」の意であるから、これを「ぼんやりとでも」としている、②・④は間違っている。

やはり、③か⑤が適当なようであるが、⑤では、今日の前に海棠の花があることになってしまっているから、答は③になる。

この傍線部の直前にある、「均しく知るべからざるに于いては」は、傍線部Eの「事の知るべからざること」と対応している。

一見見つけにくいが、「茲の棠の植ゑし所は、余の寝を去ること十歩と無く」と「今棠を去ること且に千里ならんとし」が「**対**」になっており、「隣里親戚と一飲して之を楽しまんと欲せば、宜しく必ず難きこと無きを得べきなり」と「身は罪籍に在りて、其の行止は未だ自ら期すること能はざれば、其の棠に于いては未だ遽かには見るを得ざるなり」が「**対**」になっている。ということは、**傍線部Fは、「至るに垂として之を失ふ」と「対になっている**のである。

それぞれ、**対義的な**「**対**」になっているから、傍線部Fで言いたいことは、「まさに花も咲こうとして花見の宴もするところだったのに、ダメになってしまった」というようなこともあるのと反対に、「今、目の前に海棠があるわけではないが、思いがけずあるようになることだってあるかもしれない」という内容であってほしいことなる。実は、ここで言いたいことが、次の**問8**の正解にも関連する。

正解　36　③　（6点）

問8　本文全体に表れた筆者の心情説明の問題　応用

この文章全体から読み取れる筆者の心境を説明したものとして最も適当なものを選べ。

問7の解説でも触れたように、本文末尾の、傍線部Fで言いたいことが、この**問8**にも結びついている。これから先に起こる事というのは予測しがたいものであるが、悪い事態も予測しがたいと同じように、今不遇な状況にあるということは、逆に、よい事態に転じるかもしれないということも予測しがたいのではないか。つまり、今は左遷されて不遇な日々をすごしているが、いつか許されてまた、かつてのように海棠の花を見ることのできる日もくるかもしれない、ということであろう。「悲しみに没入することなく運命を大局的にとらえ、乗り越えようとしている」は、ずいぶん前向きな表現ではあるが、**正解は⑤**とすべきであろう。

①は、「宗教的修行を積んだ人間への敬意を深め」「人間という存在を信頼しようと思い直している」がキズ。

②は、「花への執着を捨てられない自分を嫌悪」「将来に対して悲観的になっている」がキズ。

③は、「人々から交際を絶たれるという体験」が、文中にない。

④は、「何もできないと、焦燥感に駆られている」がキズ。②・④のように、マイナス志向にはなっていない。

正解

37

⑤

（6点）